



内村さんのオリジナルマシンは一見すると、他と大差ないように見える。しかし、フロントウイングの翼端板はまな板できているというから驚きだ(右上)。さらにステアリングのディスプレイも手作り(右下)。これらの作る過程におけるアイデアがたくさん詰まっている。モノづくりが色濃く残るJAF F4ならではの見えるだろう。

「性能」

性能を追求しようと思えば、高価な材料はいくらでもあります。でも性能は8割でも大丈夫だと思えば、1/10の値段で済んだりします。MAXの性能をあまりめればこれだけ安くできるんだ、というところを狙って代替品、代替材料を探してレースをしています。それがおもしろいし、うれし「いんです」と言っつのは、内村浩一選手である。

「ぼくは普通のサラリーマンで、お金に余裕はありません。でも自分で材料を探し、自分で部品を作って修理しながらレースができる。それがJAF F4の魅力なんです」

もともとクルマとバイクが好きで、高校生時代から愛車をいじりながら走らせて楽しんでた内村さん(現在35歳)。乗り物好きの過程で四輪耐久レースに誘われてサーキットへ出入りするようになった。心のなかで、いつかフォーミュラカーを走らせてみたいと思っつていた彼にとって、JAF F4に出走したのは自然な流れだったと言える。だがサラリーマンにはサラリーマンの戦い方がある。内村さんは、クルマのメンテナンスや補修、改造を可能な限り自分でこなしている。

リヤウイングは布団のうえ

内村さんがツインリンクもてぎで開催されたJAF F4選手権シリーズ第5戦に持ち込んだ、K R a c W I

だ、もともとはレンタル車両だったらしくて見た目がボロボロのひどい状態だったんです。だから安かったんですけどね(笑)

内村さんはまずモノコックの補修から始めた。「できるところはリベットを外して新しくアルミ板を張り直しました。どうしてもできないところは見た目も悪いから、上から新しいアルミ板を板金用のパネルボンドとかを使って貼って、リベットを打っていきまし。だからアルミ一枚分、強くなっているんです。修理ついでの補強です」と内村さんは笑う。

実際、マシンは一見するとアルミパネルが光って真新しく見えた。しかし内村さんの工夫はモノコックの補修には留まらない。整備中、モノコックのうえに置かれていたステアリングに目をやると「このディスプレイも自分で

2019 FORMULA 4 CHAMPIONSHIP JAF F4

PADDOCK NEWS Vol.3 www.f4k.co.jp

国内唯一開発競争のあるミドルフォーミュラF4の魅力を探る

Text & Photo: 大串 信 (Makoto Ogushi)
Photo: 酒井聖一 (Seiichi Sakai)



F4東西シリーズはダンロップタイヤのワンメイクレースです



F4協会HP
www.f4k.co.jp

「性能8割、コスト10分の1」のアイデア まな板は万能材料

NMAX 056 は、中古のモノコックを買ってきて、自力でレース可能な状態にまで仕上げたばかりのクルマだった。

「これ、先月まではモノコックだけだったクルマなんです。前のクルマが調子悪かったので乗り換えようと思ってモノコックだけ買ってきたんです。た

作ったんですよ」と内村さんが笑う。「買うと10万円以上するんですけど、これは材料費3000円くらいかな。自分でハンダづけして作ったんです。今回初投入した試作機ですけどね。残念ながら机のうえでは動いたんですけど実際にサーキットで使ってみると動かないんですよ。だから今日は感覚でシフトアップしてます(笑) まあ、そういうことも含めて工作は楽しいです」

内村さんのマシンにはまだまだ怪しいところが隠されていた(笑)。じつと見ると、リヤウイング後縁とフラップの隙間が微妙に平行ではないように見える。内村さんは苦笑しながら説明してくれた。

「リヤウイングもアルミ板を自分で曲げて作ったんです。自分の部屋の布団のうえで。布団のクッションがアルミ板を曲げるのにちょうどいいんですよ。フレームはちゃんと図面を引いて作って、その上にアルミ板を巻いていったんですけど1回目は歪んじゃってダメ。これも強度が足りなくてダウンフォースがかかると曲がっちゃうんです。でも自分の失敗を活かしてもうひとりのJAF F4仲間のためにもう一枚作ってあげたんですけど、そっちはちゃんとできています」

たったひとつのオリジナル

内村さんのマシンは「性能は8割だけ」コストは1/10」をまさに表している。作品である。「あと、これ。このフロン

日本は工業の国なんだから こういうカテゴリーは増えて欲しい

「JAF F4の魅力は、ワンメイクなら何か壊れたら指定パーツを買うしかないのに、自分で工夫して作れるところ。安いオリジナルになってそれぞれ個性が出る。日本は工業の国なんだからこういうカテゴリーは増えて欲しいですよ。クルマはできたばかりで、友人たちにボランティアで手伝ってもらってようやくここにいられるという感じ。みんな普通のサラリーマンなんですけど、みんなに助けてもらって間に合ったんです。大変ですけど楽しいですよ。楽しいが一番です。最近では若い人が工作しなからね。もっと若い人が増えると楽しいなあ」と、内村さんは言った。



※内村さん(左からふたり目)とK Rac代表の角田さん(左)、さらに一緒に戦うチームメイトたち。

トウイングの翼端板、何でできていると思います? まな板なんですよ」「まな板?」と聞き返すと内村さんはうれしそうに解説してくれた。

「バイクで峠を走っている小僧だった頃、膝を擦るんだけど膝のパッドは高くて買えないから、みんなまな板を切つてくっつけて使っていたんです。そういう、ちょっとやんちゃな時代の知識で、まな板は万能の材料だっつてことを知っていたんです。それで作ったんです。最近では色がついたまな板を売っているのを流用したんですよ」

まさか、サーキットを樹脂製のまな板が走り回っているとは知らず驚いた。しかし一方で「創意工夫」がサーキット上に健在していることを知り、うれしかったし頼もしくもあった。

RACE RESULT

<p>Round 5 7月6日 ツインリンクもてぎ</p>	<p>Round 6 7月27日 岡山国際サーキット</p>	<p>Round 7 7月28日 岡山国際サーキット</p>
---------------------------------------	--	--

